

	形式等	事項	年度	相手国	概要	ハイライト (特徴、PRできる事項)	キーワード	ファンド (実施経費の財源)	備考	
									開催日	参加人数(国内・ 国外)参加国数
(2) 国際研究集会										
天文台		重力波に関する第6回アマルディ国際会議 (AmaId16)	17年度		重力波研究分野の総合的な国際会議として、2年事に持ち回り開催される国際会議。	日本で初めての開催となる。	LCGT計画、重力波、干渉計	沖縄県、科学研究費補助金、IUPAC、井上科学振興財団、天文学振興財団、運営費交付金	17. 6. 20～24	計190名 国内50名 国外140名(11ヶ国)
		International Virtual Observatory Alliance (IVOA) 会議	17年度		各国のヴァーチャル天文台を相互接続するための標準を定める。	日本における活動度の高さを示すことが出来た。	ヴァーチャル天文台、標準プロトコル、ネットワーク	日本学術振興会	17. 5. 16～20	計87名 国内18名 国外69名(14ヶ国)
		東アジア分子雲ワークショップ	17年度		東アジア連携を重視する流れの中、分子雲に関する天文学的な議論を行うためのワークショップとして開催。	EACOA参加国から、バランスよく参加者が得られた。	分子雲、東アジア、電波天文学	運営費交付金	18. 2. 6～8	計45名 国内32名 国外13名(3ヶ国)
		Subaru-Gemini Dark Energy Workshop ("Probing the Dark Universe with Subaru and Gemini")	17年度		米英カナダ等7カ国のGemini天文台と共同で宇宙を支配すると想定される謎の存在ダークエネルギーの解明を目指す研究会。	国際天文台であるハワイ島マウナケア山頂で8m級望遠鏡の協力関係を追求する	ダークエネルギー	運営費交付金、ジェミニ運営経費	17. 11. 6～9	計75名 国内28名 国外47名(4ヶ国及び1国際機関)
		銀河系と近傍銀河のマッピング	18年度		銀河系と近傍銀河のマッピング分野の先端的研究報告及び研究者間の相互交流を目指して開催。	世界20ヶ国から約150名の参加を得て、その半数以上が海外からの参加者となった。石垣島での開催。	電波天文学、マッピング	運営費交付金、奨学金交付金	18. 6. 26～30	計150名 国内71名 国外79名(18ヶ国)
		東アジア数値天体物理学会議 (EANAM-East-Asia Numerical Astrophysics Meeting)	18年度		東アジア各国で数値シミュレーションを用いた天文学研究者の交流を目的とする。	幅広い研究分野における天文数値シミュレーション研究成果発表が行われた。	東アジア、シミュレーション天文学、	運営費交付金	16. 11. 30～16. 12. 2	計100名(概数) 国内81名 国外19名(4ヶ国)

	形式等	事項	年度	相手国	概要	ハイライト (特徴、PRできる事項)	キーワード	ファンド (実施経費の財源)	備考
核融合		ICNSP-APPTC合同国際会議	17年度		第19回プラズマ数値シミュレーション国際会議(ICNSP)および第7回アジア太平洋プラズマ理論会議(APPTC)が合同国際会議として、奈良県新公会堂(奈良市)で合同国際会議実行委員会(委員長:本島修核融合科学研究所長)の主催により行われた。	会議参加者の総数は198名でこのシリーズの会議としては最大となり、数々の優れた講演が自然した議論が行われ、成功裏に国際会議を終えることができた。	シミュレーション、可視化、東アジア	運営費交付金、寄付金	17. 7. 12～15 計198名 国内141名 国外57名(20ヶ国)
		第9回 磁場閉じ込め装置における高エネルギー粒子に関するIAEA技術会議(IAEA-TCM:9th IAEA TM on Energetic Particles in Magnetic Confinement Systems)	17年度		本会議は、磁場閉じ込め装置におけるアルファ粒子などの高速イオンの生成と閉じ込めに関する実験、理論さらには計測技術に関する最近の進展と今後の課題について包括的に議論するIAEA主催の国際会議である。	ハイライトは、主要な大型トカマクやヘリカル装置における高速イオンの閉じ込め研究ならびにITERでのアルファ粒子計測法の開発の進展である。	IAEA、高速イオン	運営費交付金、科学研究費補助金	17. 11. 9～11 計67名 国内39名 国外28名(10ヶ国)
		第15回国際土岐コンファレンス	17年度		核融合と応用技術(Fusion & Advanced Technology)をテーマに開催。	核融合関連の理工学分野のトピックスを選定し、岐阜県土岐市にて開催。	核融合研主催の国際会議	運営費交付金、寄付金	17. 12. 6～9 計137名 国内97名 国外40名(11ヶ国)
		日豪ワークショップ	17年度		核融合研において第7回プラズマ計測に関する日豪ワークショップを共同開催した。	国際的にも国内的にも幅広い研究機関からの参加が得られた。	オーストラリア	科学研究費補助金	17. 12. 11～21 計37名 国内24名 国外13名(6ヶ国)
		「核融合プラズマの高周波による加熱技術と加熱物理に関するワークショップ」(日米欧-高周波加熱技術ワークショップ 及び 日米-高周波加熱物理ワークショップ)	18年度		日米科学協力事業に基づく標記ワークショップを参加者の便宜を考慮して連続して開催した。主にイオンサイクロトロン共鳴加熱(ICH)と電子サイクロトロン共鳴加熱(ECH)に関する技術(32件)と最近の実験結果や加熱物理(19件)について報告があった。	IECHでは大電力のみならずジャイロトロンの高効率で、長時間化が進められ、JAEAで0.6MW、効率46%で1時間の運転、0.82MW、効率56%で10分の運転を達成したとの報告があり、注目された。奈良県新公会堂(奈良市)にて開催	日米協力	日本学術振興会	18. 9. 28～30 計52名 国内26名 国外26名(5ヶ国)
		第16回国際土岐コンファレンス	18年度		先進イメージングとプラズマ計測(Advanced Imaging and Plasma Diagnostics)をテーマに開催。	核融合関連の理工学分野のトピックスを選定し、岐阜県土岐市にて開催。	核融合研主催の国際会議	運営費交付金、寄付金	18. 12. 5～8 計206名 国内157名 国外49名(16ヶ国)
基生研		第51回基生研コンファレンス「遺伝子の増幅」	17年度		小林武彦助教教授がオーガナイザーとなり、微生物を中心とした遺伝子増幅の最新研究結果を討論した。	国内外の第一線研究者を招聘する。一般参加を受け、所内外の関連分野研究者にとって最新情報を得る場となる。	遺伝子増幅、モデルシステム	運営費交付金	17. 11. 5～8 計46名 国内35名 国外11名(4ヶ国)
		第52回基生研コンファレンス「生殖の戦略」	17年度		星元紀教授(慶応大)がオーガナイザーとなり、無性、有性を問わず様々な形式の動物の生殖戦略についての最新研究結果を討論した。	国内外の第一線研究者を招聘する。一般参加を受け、所内外の関連分野研究者にとって最新情報を得る場となる。	有性生殖、無性生殖、戦略	運営費交付金	18. 1. 20～23 計120名 国内102名 国外18名(8ヶ国)
		2004年度ノーベル化学賞受賞者 Aaron Ciechanoverを招聘	17年度		大隅教授が招聘。基生研特別講演会開催および研究室での研究概要説明および討論を実施。	文部科学省の招聘プログラムの一環としてノーベル賞受賞者の講演会を行い、あわせて受け入れ研究室で研究交流をおこなった。	ノーベル化学賞、ユビキチン、修飾	「文科省のノーベル賞級の研究者の招聘プログラム」、運営費交付金	18. 2. 27 講演者(イスラエル)以外に岡崎3機構内の聴衆(数十名)
		第3回生物学国際高等コンファレンス「絶滅の生物学2」	17年度		矢原徹一教授(九州大)、Callum Roberts(York大)がオーガナイザーとなり、生物の絶滅の現状と理論的モデルについての最新研究結果を討論した。	40名程度の国際的に評価の高い研究者を招聘し、1週間にわたって未発表データを巡る密度の高い発表・討論の場を提供する。	絶滅、数理モデル、生態学	運営費交付金	18. 3. 12～17 国内51名 国内20名 国外31名(11ヶ国)
		第2回EMBL-NIRBシンポジウム(バイオイメージング)	18年度		上野教授がオーガナイザーとなり、生物材料における顕微鏡可視化技術の最先端結果の発表と討論を行った。	欧州分子生物学研究所(EMBL)および基生研の研究者を中心に、国内外の関連研究者を招聘し、最新研究成果を交流する。(基生研で開催)	イメージング、蛍光標識、動態	運営費交付金	18. 3. 22～23 計158名 国内127名 国外31名(7ヶ国)
		第3回EMBL-NIRBシンポジウム(マウスの生物学)	18年度		上野教授がオーガナイザーとなり、マウスを材料とした遺伝子解析研究の発表と討論を行った。	EMBLおよび基生研の研究者を中心に、国内外の関連研究者を招聘し、最新研究成果を交流する。(イタリアのEMBL導入、突然変異施設で開催)	マウス、遺伝子導入、突然変異施設	運営費交付金	18. 4. 19～20 計46名 国内10名 国外36名(4ヶ国)
		第53回基生研コンファレンス(オルガネラの動態)	18年度		西村教授がオーガナイザーとなり、植物細胞の細胞内小器官(オルガネラ)の動態に関する最新結果の発表と討論を行った。	国内外の第一線研究者を招聘する。一般参加を受け、所内外の関連分野研究者にとって最新情報を得る場となる。	オルガネラ、動態	日本学術振興会国際研究経費、特定領域研究『オルガネラ分化』、植物科学基金、大華財団、Novartis財団、運営費交付金	18. 6. 14～17 計202名 国内13名 国外189名(5ヶ国)
		第4回生物学国際高等コンファレンス(地球圏微生物学2)	18年度		加藤憲二教授(静岡大)、Daniel J. Arp(Oregon St.大)がオーガナイザーとなり、地球上のあらゆる環境下における微生物の状況と遺伝子進化のメカニズムについての最新結果の発表と討論を行った。	40名程度の国際的に評価の高い研究者を招聘し、1週間にわたって未発表データを巡る密度の高い発表・討論の場を提供する。	メタゲノム、微生物、遺伝子進化	運営費交付金	18. 9. 10～15 計54名 国内29名 国外25名(10ヶ国)
		第4回EMBL-NIRBシンポジウム(構造生物学)	18年度		大隅教授がオーガナイザーとなり、タンパク質の修飾による構造変化についての最新研究結果の発表と討論を行った。	EMBLおよび基生研の研究者を中心に、国内外の関連研究者を招聘し、最新研究成果を交流する。(基生研で開催)	構造変化、タンパク質、修飾	運営費交付金	18. 12. 3～5 計82名 国内70名 国外12名(5ヶ国)
	第5回生物学国際高等コンファレンス「種分化と適応」	18年度		清水健太郎教授(Zurich大)、Ian M. Dworkin博士(North Carolina St.大)がオーガナイザーとなり、種分化と適応について、生態学、理論生物学、分子生物学、進化生物学の観点から総合的に発表と討論を行った。	50名程度の国際的に評価の高い研究者を招聘し、1週間にわたって未発表データを巡る密度の高い発表・討論の場を提供する。さらに約20名の国内の若手研究者の参加を許可し将来の発展に備えた。	種分化、適応、生態遺伝学	運営費交付金	19. 3. 11～16 計70名 国内35名 国外35名(8ヶ国)	

	形式等	事項	年度	相手国	概要	ハイライト (特徴、PRできる事項)	キーワード	ファンド (実施経費の財源)	備考	
生理研		第33回生理研カンファレンス 筋収縮の調節タンパク質—構造、機能および疾患(トロポニン発見40周年記念国際シンポジウム)	17年度		江橋節郎先生によるトロポニン発見の40周年を記念して開かれた国際シンポジウムで、海外から11名、国内から約120名が参加して、筋収縮調節タンパク質に関する最新の知見が報告・議論された。	江橋先生やA. G. Szent-GyorgyiやH. E. Huxleyなどのノーベル賞級の筋収縮タンパク質研究者が一同に会した。	トロポニン、トロポミオン、筋収縮	生理学研究所 トロポニン発見40周年記念シンポジウム	17. 10. 25～28	計130名 国内119名 国外11名(4ヶ国)
		第34回生理研カンファレンス 感覚統合と可塑性: ヒト高次脳機能への多角的アプローチ	17年度		非侵襲的脳機能計測手法を用いた、人間の高次脳機能計測に関する国際学術集会。	感覚統合と脳可塑性に焦点をあてて、重点的な議論を行った。	機能的MRI、脳磁図、脳可塑性	生理学研究所 総合研究大学院大学	18. 3. 8～10	計71名 国内55名 国外16名(5ヶ国)
		第35回生理研カンファレンス 大脳皮質・海馬の局所神経回路研究	18年度		大脳皮質のマイクロサーキット構築に関する研究会。最先端の研究を行っている諸先生方が集まり最新の発表を行い、議論交わし、有意義な時間を共有した。	外人研究者だけでなく日本人研究者も発表し、日本の最先端の研究を紹介した。若手は、ポスター発表し、最先端を走る研究者と直接意見交換した。	シナプス、神経回路、大脳皮質	生理学研究所 日本神経科学会サテライトシンポジウム 特定領域研究「統合脳」	18. 7. 24～26	計124名 国内110名 国外14名(3ヶ国)
		第36回生理研国際シンポジウム 第3回ニールスステンセン記念国際唾液腺シンポジウム	18年度		唾液分泌と唾液腺に関し、研究者が世界中から一同に介し、基礎的成果をいかに臨床に応用できるかを目標に最先端の研究成果を討議した。	我が国ではじめて開催された。日本の医学黎明期に大きな影響をあたえたフアラリキウスについての講演会を市民フォーラムとして開催した。学術的には 基礎的成果をとりいれた遺伝子治療の成果、またプロテオミクス応用の成果などを含め、唾液腺に限定した濃密な議論が行なわれた。	唾液腺、基礎研究、臨床応用	生理学研究所 日本学術振興会国際学術集会助成	18. 10. 20～24	計122名 国内72名 国外50名(14ヶ国)
		第37回生理研国際シンポジウム 膜電位 — 化学シグナルの新展開: 多様性とメカニズム	18年度		膜蛋白に関して生理学、構造生物学、細胞生物学、ゲノム科学の複数の分野での研究者を集め、電気化学連関機構に関わる膜蛋白を中心として学際的融合的な研究・教育の発展を目指す。	電位センサーを発見したBezanilla博士、ノーベル賞の対象となったカリウムチャネルの構造を解いたDoyle博士など著名な研究者を招聘し、膜蛋白の構造と機能について最先端の研究成果を発表する。	イオンチャネル、基礎研究、バイオインフォマティクス	生理学研究所 総合研究大学院大学 大阪大学蛋白質研究所	19. 3. 14～16	計193名 国内164名 国外29名(4ヶ国)
分子研		第1回NAREGI国際会議	17年度		ナノサイエンス分野における計算科学の国際会議を奈良で開催。	分子科学、物性科学の分野横断的な計算科学	計算科学、グリッド	文部科学省	17. 6. 14～17	計280名 国内254名 国外26名(8ヶ国)
		第66回岡崎コンファレンス	18年度		今回のテーマは軟X線ラマン分光と関連現象。岡崎で開催。	創設時より共同研究の活動の一環として申請の中から選考して年2程度開催。外国人5名～10名、日本人40名程度が3日間はドゴードン会議的に特定テーマについて議論。参加者の旅費滞在費は原則支給。5年以上中断してきたが、平成18年から再開。	軟X線ラマン散乱、内殻励起、放射光	運営費交付金	18. 8. 17～19	計約50名 国内約40名 海外約10名(4ヶ国)
		International Conference on "Polymer in Organic Chemistry"	18年度		高分子化合物の有機化学における利用、応用を議論。	IUPACによる国際研究会、高分子化合物の有機化学における利用、応用を議論	高分子、有機合成、触媒	高分子学会	18. 7. 2～7	計120名 国内約70名 国外約50名(32ヶ国)
		分子研研究会 "New Frontiers of NMR Molecular Science"	18年度		超高磁場NMR装置を活用した分子科学研究の新たな可能性を議論した。	招待講演者としてドイツからマックスプランク研究所A. S. Ulrich博士、カーlsruhe工科大学C. Griesinger博士が参加。両博士を含む7名の国内外の一線級研究者による討議。	NMR、ナノ構造解析、固体核磁気共鳴分光(分子科学、超高磁場)	運営費交付金	18. 7. 31	計52名 国内50名 国外2名(2ヶ国)
		分子研ナノフォーラム "New Cutting Edge and Perspective of Structural Biology"	18年度		構造生物学の最先端研究において超高磁場NMRの果たす役割を国内外の第一線の構造生物学者と討議した。	招待講演: スイス連邦工科大学のKurt Wüthrich教授(2002年ノーベル賞受賞)。	NMR、構造生物学、超高磁場	運営費交付金	18. 10. 25	計45名 国内44名 国外1名(1ヶ国)
		分子研研究会 和周波分光で拓く分子科学の新展開	18年度		近年幅広い分野で利用されつつある和周波分光法を、若手研究者には基礎を講義し、研究会ではこの分野で活躍中の研究者と討議をし、基礎から応用に至るまでの様々な視点から議論を深めた。	カリフォルニア大バークレー校のShen教授、ハイデルブルク大のHimmelhaus博士の招待講演。	和周波、表面、界面	運営費交付金	18. 12. 5～6	計50名 国内50名 国外0名